

# 子ども六斎から 学ぶもの



京都市立伏見南浜小学校  
校長 杉田明生



吉祥院の伝統芸能を子どもたちに伝えたい。その熱き想いをお聞きしました。

インタビュー収録／2012年5月24日（木）19:00—20:30 伏見南浜小学校校長室にて



**美優** 杉田校長先生、今日はお忙しいところ、校長室までお邪魔させていただき、ありがとうございます。今日は宜しくお願いします。

**杉田** 宜しくお願いします。何か照れるなあ。

**美優** わたしたちは、杉田校長先生のことを「子ども六斎会の生みの親」と思っています。

**杉田** 嬉しいなあ。光栄やなあ。子ども六斎のスタートは、当時、センター学習のすそ野学習で六斎の聞き取り調査をして、それを「六斎壁新聞」に書きまとめようという取り組みから始まった。木村信彦君らの上の学年から取り組み、その年代で終わってしまうんやなくて、なぜ吉祥院で六斎が受け継がれてきたのか、地域で生まれ育った子どもたちにこそ知って欲しいという願いからスタートした。それは、単に国の重要無形民俗文化財に指定を受けた文化財であるとか、古くから吉祥院に受け継がれてきた伝統芸能であるとか

ではなくて、差別との闘いの中で生まれて、差別にあらがいながら、六斎を守って来られたこのことを、地域の子どもたちに知って欲しかったし、そのことを誇りに思ってもらいたいと、同和教育の一環として、子ども六斎を何とか取り上げられたらいいなあと思ったのが切っ掛けなんや。

**美優** 子ども六斎が実際にスタートしたのは、信くんや大ちゃんらの学年からなんですか。

**杉田** 正式にスタートしたのは、木村信彦君や村田大輔君らが5年生になる年からかな。

**美優** 信くんと大ちゃんは、今31歳やから、20年前になりますね。

**杉田** 5年生から2年がかりで取り組んで、その時に作った「獅子頭」が今も残っているはずやけど、はじめの獅子頭はみかん箱、岩見重太郎の衣装はゴミ袋で作った。これからもセンターに通う子どもたちも使えるようにしたいなと思って、本物の獅子頭を見せていただいて、次ぎの獅子頭は目や口も動くように作った。針金で骨組みを作り、目玉は発泡スチロール、福田先生が古いカーテンなどの端切れなどを探してくれて岩見重太郎の衣装を作った。色々工夫しながら作ったのがこれや。（子どもたちが作った獅子の写真を見て）当時、センターに通う子どもたちの発表会「全市すそ野交流会」が当時永松教育センターに出ようかと持ちかけたら、信くんや大ちゃんが「六斎をアピールしに行こう」と凄く



盛り上がり、一生懸命に蜘蛛の糸を巻く練習に取り組んだり、先生らは六斎を教えられないので、保存会の方が練習を見に来てくれたり、古いビデオを何度も見ては練習して覚えた。そやけどビデオやと鏡を見てると同じで、本物の動きとは逆に覚えてしまう。

**里紗** そうか逆になるんや。

**杉田** 当時は、本物の太鼓や笛、鉦を借りることも出来なかったもので、その当時は、太鼓は何で練習してたと思う。

**二人** 空き缶？

**杉田** そう空き缶で練習してたんやで。今は練習用の太鼓のレプリカがあるけど、当時は、給食に出たトマトケッチャップの空き缶で練習したんや。空き缶やと同じ音しか出ないので、釣に使う板しずを張って、つまり鉛の板を張って、違う音が出るように工夫したり、3センチ張ったらどんな音が出るかな、10センチ張ったらどんな音になるかな、またプラスに張ったらどんな音か、色々試して違う音を作った。太鼓のばちは、古くなったスクールほうきの枝を切って、村田<sup>こうき</sup>幸樹や石田<sup>りょうき</sup>良樹がダンボール箱を太鼓代わり練習していたり、その中で、幸樹と良樹が凄く競っていてライバル心や競争心が出てきた。僕も負けてらんみたいな、二人が意識し出し、結果的に二人は凄く上達していった。こうして頑張っている姿を見て、房一さんや地域の方が本物の太鼓を叩かせてやって欲しいと保存会に頼んでもらって指導していただけることになった。でもはじめは、保存会の方もあまり良い

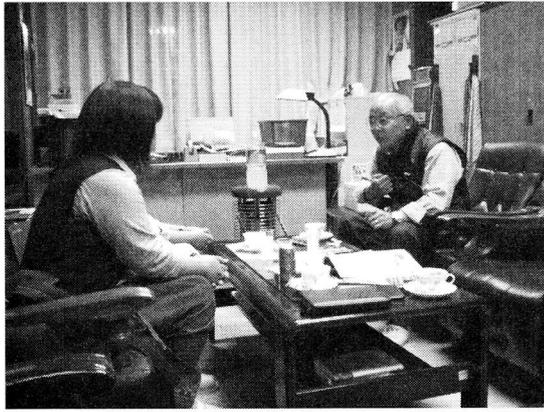
顔をしなかった。実は反対されたんやな。

**里紗** それはなぜ反対されたんですか。

**杉田** 当時、和田保存会会長が反対した二つの理由は、一つは、吉田渉君らの頃にも同じように学校から頼まれて指導をしたことがあって、その時の親御さんから随分苦情が入ったらしい。その苦情とは、進学のためにセンターに通わせているのに、六斎をさせたら勉強が出来なくなるという理由の苦情が入った。もう一つは、センターで六斎をやることはいいけども、間違った癖が付いて、その癖が直らないという、この二つの理由であまり良い顔をしてもらえなかった。でも房一さんが和田会長に頼み込んでくれたんや。地域の敬老の集いに出演したのを和田会長が見てくれて、「ここまで子どもたちが上手に太鼓を叩けるのか」と感心されて、指導してもらえることになった。保存会の村田新造さんが手取り足取りで指導してくれた。新造さんたちの若い頃は、貴重な村の財産の太鼓に触れることが出来なかったそうで、お茶碗をお箸で叩いて練習して、やっと叩けるようになって、ばちで手を叩かれた厳しい時代の人やけど、今どきの子どもに厳しい指導しても育たない。それよりか、六斎に興味や関心を持って、長く六斎を続けられるようにと指導してくはった。このことが凄いなと思ったなあ。その練習に房一さんたちが激励に来てくれたり、親御さんが様子を見にきながら励ましてくれた。みんなの支えがあって、子ども六斎が今まで続いたんやと思う。永松教育センターの発表会で期待以上に上達した姿を見て凄く感動してくれはったし、やっぱり吉祥院の子どもたちは、六斎が体に染み付いているんやと思いき知らされたなあ。

**美優** 六斎が体に染み付いている？

**杉田** 六斎の技術的なことやなくて、吉祥院六斎の成り立ちや、他の六斎組が潰れていく中でも、菅原組が続いているという歴史的事を学ぶことの中で頑張ってくれたと思う。吉祥院には8組の六斎組があって、新田、石原、嶋にも六斎組があった当時、吉祥院天満



宮を中心に東西南北があるように東条・  
ひがしんじょう 西条・みなんじょう 南条・きたんじょう 北条があるはずが、当時は  
みなんじょう 南条には六齋組がなかったんや。そのような  
 歴史の勉強したことあるかな？

**里紗** はい。研究会で勉強しました。

**杉田** 六齋を習いたいけども教えてもらえない、天満宮の舞台に上がりたい、六齋を演じたいという願いがあっても叶わなかった。という歴史も学んだかな？

**里紗** 差別を受けて教えてもらえなかったことや、教えてもらってもデタラメを教えられたこととか。

**美優** 町内の地主さんが小作料の減免を引換に教えて欲しいと頼んだ話も勉強しました。

**杉田** その通りやで。教えられてもウソを教えられた。それは各六齋組には、少しずつ違いがあるから、どこの六齋組が教えたのか分かってしまうのでウソを教えられた。そのウソを演じて周りからあざけり笑われたという話があった。菅原組の六齋は、そこからのスタートなんや。差別と闘いながら伝承してきたという歴史がある。清水寺での六齋奉納の話も学んだかな。

**美優** 菅原組の後に舞台に上がれるかという話ですか。

**杉田** そう。塩を撒まかれたとか、そんな歴史を学ぶことで、六齋の火を消したくない。この町で生まれ育った自分たちやからこそ、六齋の火は消せないという使命感や熱い気持ちが体に染み付いているんやと思う。

**里紗** 今の子どもたちは、差別と闘いながら

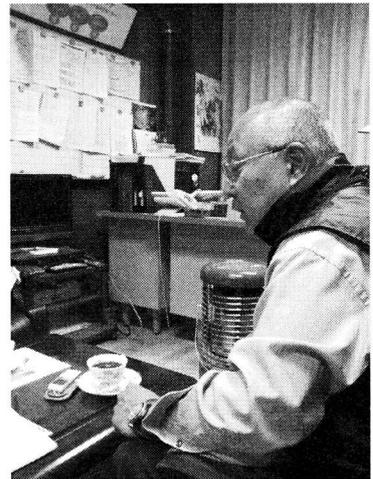
生まれたという話は知らないと思います。

**美優** 私たちも研究会で活動する中で、そのような歴史があることを知りました。

**杉田** 当時の親御さんの考え方や願いも様々で、永松教育センター（現総合教育センター）に出演するのは賛成やけど、吉祥院天満宮の舞台には立たせたくないという親御さんもおられた。それは菅原町の出身やということが知れ渡ってしまうという理由で反対された親御さんもおられた。

**美優** 今は天満宮の舞台に上がることがカッコいいという子どもたちが増えています。

**杉田** 吉祥院六齋には、光の部分もあれば、影の部分もある。華やかなスポットライトを浴びているところだけを知るんじゃないくて、その根っこに



何があるのかということも含めて、学んで欲しいと思う。今の子どもたちに伝えて欲しいし、自分たちこそが六齋を守り、更に発展させるという思いを持ってくれると嬉しいなあ。伊藤忠次保存会長の頃には、子ども六齋用のはつぴを揃えてくれはった。嬉しかったなあ。でも一つ心配があって、天満宮の舞台に女性が上がるかどうか心配やった。子ども六齋会には、女の子もいたし、保存会から「女性は舞台に上がれない」という話が出るんやないかと思った。でも伊藤会長から「先生そんな時代やないから大丈夫や。保存会の会員には私から言うておく」と言っていたいでね。伊藤会長の配慮がなかったら、高橋さえちゃんや美優ちゃん、里紗ちゃんだつて天満宮の舞台に立ってなかったと思うで。

**美優** インタビューのテーマが「六齋から学ぶもの」ですが、子どもたちが六齋に関わる中で学んで欲しいことは何ですか。

**杉田** 六斎に限らず、フィールドワークとして保育所、隣保館など、地域に建てられている施設を調べることで、今まで知らなかったことが見えてくる。知ることによって生まれた町に愛着が持てる。その一つに六斎の歴史を学ぶことを行った。この地域に生まれたことを胸張って自分のふるさとを誇りに思える人になって欲しいと思っている。そういう意味で、信くんや大ちゃん、美優ちゃんも里紗ちゃんも、自分が生まれた地域を誇れる人になってくれたんやと思う。先生も学習センターや吉祥院小学校に勤務した中で、地域の子どもたちには、広く高く色んな将来展望を持って欲しいし、自分になりたい仕事に就けないというのはあかん。この地域で生まれたからこそ、将来はこんな仕事に就きたい、こんな大人になりたいという広く高い将来展望を持って欲しい。僕は大工さんになりたい、寿司職人になりたい、医者を目指すのであれば医者になれるような人に育てて欲しいと思っている。自分が就きたい仕事に就けない社会ではあかんのやと房一<sup>ふさかず</sup>さんはいつも言っていた。先生も全くその通りやと思ってる。学校に勤めている一人の人間として、そのような子どもたちに関われることは喜びやっだし、今も誇りに思ってる。吉祥院地域で教職生活の半分以上過ごして、吉祥院で色々と学ばせてもらったことを、この南浜小学校で子どもたちや地域の人たちに恩返ししているつもりなんや。子どもたちが興味や関心を持って、これに先生らが熱意を持って接したら、子どもたちは予想以上の遙か大きな結果を出す。だから誠心誠意接すれば、必ずそれなりの成果を得られる。一生懸命頑張ったら自分を裏切らないということの子どもの姿から、地域の人たちから学ばせていただいたと思ってる。話が飛んで申し訳ないけど、NPO法人ふれあい吉祥院ネットワーク主催の「ふれあいひろば講演会」で六斎についてのパネルディスカッションに出演した時、一つ残念に思ったことがあった。子ども六斎会の発表が終わると同時に、親御さんたちがスーッと帰ってしまった。そ

のことが凄く残念やったな。自分の子の写真やビデオを撮るのは、子を持つ親として凄く分かるけども、伝統芸能は一旦火が消えてしまったら、今度立て直すのは至難の業



やと思っているから、子ども六斎会の親御さんやからこそ、最後まで残ってもらって、吉祥院六斎は今後こんな姿であって欲しいとかと、親の立場として、子どもたちにこんなふうになって欲しいという話が出来たら良かったけど、それが出演が終わったら、スーッと帰られたことが凄く残念やったなあ。

**美優** 最近よく練習会に見に来てくれます。吉祥院六斎の歴史とかも親御さんに知ってもらうことも重要と思います。

**石田** 六斎の伝統を消さないためにも、保存会を支え、企画や情報発信していく人材が必要やね。美優や里紗らには、六斎を伝え、運営するマネジメントも担っていける人材に育てて欲しいな。

**杉田** 息の長い取り組みになりますし、直ぐには結果を得られない。六斎の担い手であることには間違いはないけど、根気よく、地道に取り組んで欲しいと思います。若い二人が頑張って六斎をやることで、周りにいる子どもたちも僕も入りたい、私もやりたいと、二人の頑張っている姿を通して、子どもたちがそのように思ってくれたら嬉しいですね。

**美優** なぜ六斎をやりたいのか、まだはっきりとした理由がよくわかりません。

**里紗** 小さい頃から六斎をやっているので生活の一部、やるのが普通になっています。

**美優** 小学1年生からやっていて、ママに叱られながら練習に行ったこともあったし、でも太鼓が上手く叩けるようになって、ママとかに誉められるとやっぱり嬉しかったです。

**杉田** その答えになるかどうか分からんけど、各六齋組が天満宮に奉納していた頃は、翌朝まで行われていたというし、ある時、台風が来て桂川が決壊しても六齋奉納を止めなかった。それ程熱が入っていたそうや。今みたいに娯楽が豊富でなかったからでなくて、晴れ舞台、ひのき舞台で六齋が出来るという意気込みがあったんやと思う。そんな姿から学ぶこともあるし、同じように二人が頑張ってる姿を通して、何か伝わると思う。そやけど、保存会の人たちが、それぞれの仕事を終えて、疲れた体で指導に来てくれても、ちょっと練習やっては倍ほど遊び、またちょっと太鼓を叩いてはあっちで遊び(笑)。来てくれた人に申し訳ないなあと思ったりしたこともあったな。今はそんなシーンはないか？

**美優** 今でも時々あります。ジュースを飲んではずぐに遊ぶし(笑)。

**杉田** でもここまで続くとは全然思わなかった。そもそもすそ野交流会でもそんな結果を期待してなかった。むしろプロセスというのかな、そこにたどり着くために、こんな工夫や努力をしたとか、みんなで力を合わせて取り組んだということが、この後、何かの力になるやろうと思ったけど、今日まで続くとは思っても見なかった。良き理解者と良き協力者に恵まれたというのもある。その理解者や協力者は、子どもたちが頑張っているからこそ協力してくれはる。さっきのマネジメントの話やないけど、房一さんがいやはる限りは

**二人** 絶対大丈夫！(笑)

**杉田** そやけど房一さんかて、子育てを終えたし、これからは自分のしたいことをするんやいうて、もしニュージーランドに永住しはったら、その時は大ピンチやでえ(笑)

**美優** 行かんといてえ〜。

**石田** 何〜やそれ(笑)。そやから六齋を運営する人材が必要なんや。スポーツで例えたら、保存会の人たちは選手側で、運営や企画する側の人材が育っていない。六齋保存会をしっかり運営出来る人材も同時に育てることが重要やと思うね。

**杉田** 六齋に関わらず、まちづくりのジェネ

ラルマネージャー的な人になって欲しいですね。房一さんたちがいなかったら、NPOも無かったやろうし、コミュニティセンターだって、違う企業に渡ってるかもしれへんで。

**里紗** うんうん、それはそうかも。

**杉田** 学習センターも学習塾のような企業が入り込んでくる可能性だってあったしね。

**里紗 (突然)** あれ「遥かなる夢の途中」って昔、学習センターに飾ってあったやつですか。

**杉田** 覚えてくれてたか。先生が一番好きな言葉なんや。って突然どないしたん(笑)

**里紗** 学習センターの入ったところにずっと飾ってあったのを急に思い出して…。

**石田** 六齋歴史資料展示室の入口の看板の文字は、杉田先生に書いていただいたんやで。

**二人** あっそうなんですか。

**美優** 「遥かなる夢の途中」「負けたらあかん」も先生が書かれたんですか。

**杉田** 好きな言葉やったし、親父おやじが生きていた頃に頼んで書いてもらったんや。

**美優** 杉田先生が校長先生やと、その小学校めっちゃ楽しそうで温かそう。

**杉田** (笑)ありがとうございます。嬉しいなあ。

**美優** 最後に、これから研究会や子ども六齋会に期待するものをお聞きかせください。

**杉田** それこそ「遥かなる夢の途中」やな。我がまち吉祥院を誇れる人になって欲しい。色んな分野の仕事で頑張ってくれて、春と夏の天満宮のお祭りには、みんなが集まってくれるそんな地域や人になって欲しいと思う。頑張ってや。頼むで…。今日はありがとう。

**二人** ありがとうございます。



石田房一代表 杉田明生校長

伏見南浜小学校校長室にて